

釣れ釣れなるままに

2000年思い出の釣行記 PART. 1

# 漁獲がホウ

鹿島釣狂



釣遊会第1回大会

☆開 健 日 平成12年4月23日

☆開健場所	豊浜漁港～栄浜漁港		
☆入釣場所	蒲原大平盤		
☆潮	干潮	00:14	-5cm
	満潮	07:39	15cm
	干潮	11:38	12cm
☆釣果	カジカ	340	mm 2
	ホッケ	388	mm 99
	真ガレイ		2
	重量	265	0g
	合計	993	点
	成績	8位	
	累計点	8点	

## 合間をぬって

職場の異動を命じられた。赴任先は同じ岩見沢市内であり、自宅からさらに近くなった。自宅から車でほんの5分程度の道程であるが、宮仕えの身でもあり公宅住まいを余儀なくされる。転勤先の公宅は築後3年ほどの真新しいものであり、私一人が住むには贅沢で豪華な屋敷である。元職場の後任者に明け渡した公宅は、和室の床が抜けており、板を渡してその上にベッドを置いての使用で何とか凌いでいたが、引っ越しの折に見かねた地域のお偉方が市に掛け合ってくれて直すことができた。現在はどこの自治体もマイナスシーリングであり致し方のないところであるが・・・。

職場はほぼ同じ規模であるが、若い職員が多く活気に満ち溢れている。しかしこれまでの職場のような落ち着いた雰囲気はない。どこか慌ただしく上滑りの感じがするのは赴任したての身だからなのだろうか。さらに、同じ職種で組織され、職能の向上を意図した会の事務局長となり、仕事には猛烈に追いかけて回される事になる。他にも事務局をいくつかもっており、その事務量は膨大になる。おのずと月2回の週休日や日曜・祝日も職場に出向く羽目になる。

私は幸い病気と言えるようなものは罹った事なく、職場を休むのは年次休暇でとる風邪の2日程度である。今までは健康で過ごすことができたのでそれほど問題は抱えていないが、この先のことを考えると不安な気持ちにさせられる。しかし、親から譲り受けた性分であり、いまさら変えることもできず、そんな我が身を恨めしく思うばかりである。みずがめ座の5日には50歳を迎えることになった。しかし、その殺人的スケジュールの合間を縫って、今年度も釣り大会だけは何とか参加したいものだと考えている。

## 大切にしすぎるのも

転勤の慌ただしい中、釣遊会から第1回大会の案内が届いた。仕掛けは、今年の正月休

みに作り終え、4月の大会に向けて準備しておいたので万全である。しかし、エサだけは正月から準備できるはずもなく、当日、あわてて準備することになる。出発当日の土曜日にも同窓会の役員会があり、滝川で会議を終えた後、スーツ姿のままエサの買い出しにかかる。いつも利用しているスーパーにはサンマが置いていない。他の店にもいくつか寄ってみたが同じ状況である。この時期サンマはないのだろうか。ある店で糠や麴・南蛮等で味付けしたサンマを見つけたのでそれを購入してみた。

イカゴロはやはり融けきらないまま出発時間を迎えた。釣遊会のメンバーは既にほとんどが集まっており、今年の釣りへの意気込みを感じさせる。

いざ出陣とバスに乗り込もうとすると、リュックの底からエサで満杯のバツカンがドサドサッと落ちてきた。リュックの底が裂けたのだ。このリュックは使用し始めてから10年にはなる。錆びて痛んだ金具や縫い目の綻びを馬具店に持ち込み修繕しながら大事に扱ってきたものだが、いよいよ寿命のようである。縫い目の綻びではなく布そのものが裂けはじめていたのは分かっていたのだが、物を大事にせよという親の教えを忠実に守っていたのである。

皆さんの冷やかな注目（本人だけがそう思っているのであり誰も関心を寄せてくれてはいない）を浴びながらとりあえず、座席に持ち込んで修理する羽目になる。フラシに付けた長い細紐をリュックの上から下までぐるぐる巻にし、応急手当はできた。しかし、リュックから道具等を取り出すときに一々ぐるぐる巻の紐をほどいているとなると・・・。  
ウム、ムムッ。

## 我が会のキジルシ

本日の天気予報では、北海道西南部に低気圧が近づいており大荒れになることを告げている。それで、またまた、どこに入釣するかを悩むことになる。大平川河口の岩場に一度は入釣してみたいと考えていたが、前日の大雨で乗ることができないであろう。案の定、大平川に架かる橋の上から眺めると、夜目にも濁流が渦巻いているのが分かる。

私が入釣場所を悩んでいるうちに、蒲原を通り越してしまつたらしい。蒲原で降りるはずだった嵐氏や吉井氏は、バスがリターンできる場所がないため、最後までお付き合いして、またここに戻ってくるらしい。

穴潤平盤は前年度初めて挑戦してみたが、たくさんの先客がいて釣りにならなかった。天気予報が芳しくないこともあり釣り人は少ないことも予想されるが、今年の釣り銀座の二の舞いは御免蒙りたい。しかし、矢根氏が今年の屈辱を晴らそうと果敢にバスから降りて行った。釣り人は誰も居らず、釣果のほうはいざ知らず、場所の確保だけは矢根氏の独壇場となったとのことである。

ホッケ岩、シマロツペ、ツキの岩を通り越しキジルシの岩で我が釣遊会のキジルシ精鋭3名が降りる。しかし、キジルシの岩には乗れなかったとのこと。佐々木氏が進む。それを岡氏が追う。さらに若気を出した（失礼、彼の肉体も精神も大変若いのであるが還暦を

越えているので)堀内氏が続く。堀内氏が膝ぐらいで躊躇していると、佐々木氏が胸辺りで引き上げてくる。今回は断念したとのことである。佐々木氏も堀内氏も下見をしての釣り場の選定であったため、悔しい気持ちは如何ばかりであったろう。

さらにハズレの岩を通り越し、栄浜漁港でたくさんの会員を降ろし、リターンして蒲原まで戻る。私も、ズルズルと最後までお付き合いし結局蒲原平盤に乗ることとなった。いつものことながら己の主体性のなさにはホトホト呆れ返るばかりである。

## 沸き始めたホッケ

天気予報ははずれてくれて波もなく、しかも干潮のために平盤はどこまでも歩いて行けるような様子であるが、初めての入釣ということもあり、エンカマに注意して恐る恐る歩いた。吉井氏が嫁さんのカジカを取るために平盤の付け根でリュックを下ろした。嵐氏が中間辺りでやるという。私は先端に出たい気持ちもあったが、嵐氏の釣技を見学するのもよ



かろう。彼の横に並んで竿を出す。

間もなく、快いアタリと共にホッケがポツンポツンと釣れ出した。ねらいのカジカが留守だった吉井氏もやってきて3人で次から次へと爆弾を打つものだから、ホッケが連続して釣れ出した。

親子のルアー釣り師がやって来て隣に入った。沸いて来ているホッケの群れにルアーを飛ばし、誘いをかけながら引いてくると一投一投にホッケが上がってくる。子どものほう

が何やら腰をためて大きく曲がったルアー竿から、銀色に光った魚を釣り上げた。近寄って見ると50cm程のアメマスである。海のアメマスを初めて見せていただいたが、川で釣るものより遥かにビューティフルでグラマラスである。淡いグリーンで透き通った魚体に浮き出た白い斑点がピンク色に染まっている。

## 嫁も釣れて

竿尻がガクンと持ち上がった。バタバタとするホッケのアタリではない。カジカだ。35cm程のものだが嫁が上がったのでまずは一安心である。気をよくして吉井氏や嵐氏のバツカンを覗くと、40cm程のアブラコが収まっていた。35cm程のカジカで鼻歌など歌ってはいられない。さらに、自分の場所に戻って、いるであろうアブラコを狙って竿を振る。またまたカジカである。先程のものと同じような大きさである。重量はこれで稼げたが嫁さんのアブラコがほしい。

ホッケは相も変わらず次から次へと上がる。針を呑み込まれたホッケを丁寧に針から外すのが面倒で針素ごと引っ張ると、真っ赤な鰓と一緒に胃や腸まですっぽりと抜けてきた。背中にゾクツと悪寒が走る。一度に5匹が針掛かりする。仕掛けの針数は6。内二組はゴロ針であるが、そのゴロの頭を引っかけた部分にも食いついて来たことになる。(仕掛け図参照) いかにもホッケが沸いて来ているのかが分かるだろう。

それにもめげず、アブラコの1本が来ることを期待して打ち続ける。無造作に投げ入れていたホッケがバツカンから溢れ出してきた。持ち帰ることはできないのでフラシに生かしたまま入れておく。そのうちにフラシの中のホッケもあふれてきたので、釣っては放しの状況になる。

## アブラコに振られ

朝方、俄に雨が降り出す。慌てて散らばった道具類をリュックにしまい込む。嵐氏は、ビニルの大きな袋でリュックを覆っている。さすが釣技に優れている人物は、道具等も大切にしている。私などは行き当たりばったりなので、先のリュックの件となるのである。

いくら釣っても大きくなるホッケに呆れた吉井氏がアブラコを求めて移動していった。間もなく、遠くの岩場から歓喜の大声を張り上げている。待望のアブラコを抜き上げたい。嵐氏もカジカ狙いで移動していった。

私は岩場の先端に出て行く。大アブラコを夢見て遠投を繰り返すが、竿を揺らして上がってくるのは放流サイズのホッケばかりで入れ替えることのできるものではない。しかし、ここには砂が噛んでいるのか、25cm程の真蝶が2尾来てくれた。今晚の煮付け用の魚も確保できたので、時間にはまだ少し早い切り上げることにする。最後には底の抜けたリュックを紐で括らなければならない。

フラシに入れたホッケは海にお帰り願う。あまりの数と似たような型なので審査に提出するものを吟味し、選定する事はできない。カジカ2本と適当に選んだホッケ3本を審査用のビニルバケツに詰め込む。バツカンにぎっしりと詰め込まれたホッケの重みが肩に食い込む。帰りのバスが通る国道はすぐ近くなので2回に分けて荷物を運ぶことにした。

## ガッツポーズの意味は

審査の結果、私は993 (ホッケ 388 mm + カジカ 340 mm + 重量 2650g) 点で7位入賞となる。

優勝は1341 (カジ 442 mm + アブ 427 mm + 4720g) 点の佐々木氏、準優勝は1094 (アブ 405 mm + カジ 367 mm + 3220g) 点の堀内氏、第3位は1060 (ホッ 384 mm + アブ 375 mm + 3010g) 点の矢根氏であった。身長優勝は42.4cmのアブラコを釣り上げた前野氏であった。キジルシの岩には乗れなかった先のキジルシ組が勝ったのである。

釣遊会では第1回大会と最終の第7回大会で団体戦を取り入れている。私は抽選で佐々木氏、荻野氏、西川氏と同じチームとなり、団体戦を征することができた。僅か1点差で

2位になったチームからの悔しさのこもった罵声をかき消し、私たちは全員大はしゃぎで豪華景品を受け取った。個人タイトルで自分の名前が呼ばれた時には、照れ臭さもありこっそり拳を握り締める程度のガッツポーズしかしないのだが、団体戦となると大いに自分たちをアピールできるから不思議である。

今大会は同点が二組出た。993点の私と吉井氏。そして1003点の島氏と大前氏である。1点は長さにして1ミリ、重さで10gだから本当に僅かの差で個人タイトルも団体優勝も決まってくるのである。

団体優勝の余韻に浸りながら、ほろ酔い気分で帰路についた。自宅に戻りホッケの数を数えて見ると、丁度100匹に1匹足りない99匹であった。放流したものを含めるとかなりの数を釣ったことになる。次の日、大きなクーラーに詰めて新しい職場に持って行き、同僚に配ることとなった。4月ということもあり脂の乗りはイマイチだと思われるが、釣りたての新鮮なホッケに舌鼓を打ってくれたものと思う。次回の大会は新鮮な日本海のアブラコを同僚に食してもらおうべく奮闘を誓っている。